

[原著論文]

私立幼稚園教諭における職務上の困難

——新任時と現在の分析——

高平小百合*・若月芳浩**・佐久間裕之*・宮崎 豊**・工藤 亘*

要 約

本研究では、幼稚園教諭が保育現場でどのような職務上の困難に遭遇しているかを検証する。特に、新任時特有の困難と現在（2年目以降）の困難を13項目の要因に関して明らかにする。新任時には、「保育について」「学級経営」「軽度の発達障害が疑われる子どもへの対応」「子どもとの関係」の4要因が他の要因よりも困難度が高かった。一方、2年目以降の教諭が現在抱えている問題としては、「軽度の発達障害が疑われる子どもへの対応」及び「軽度の発達障害が疑われる子どもの保護者への対応」の困難度が高かった。また、新任時の困難度と現在の困難度を比較した対応のあるt検定による分析の結果、新任時より現在の方が困難度が高かったのは「保育について」「学級経営」「子どもとの関係」などであった。相関分析の結果、「園内の連携や協力」「園内の人間関係」「管理職との人間関係」「園務分掌」などにおいて有意な正の相関関係がみられ、新任時に困難度が高かった教諭ほど、現在（2年目以降）もこれらの事柄について強く困難を感じている傾向があることがわかった。また、自由記述の結果から、これらの困難度が高い要因に関して具体的にどのような事柄が困難の原因になっているかを明らかにした。

キーワード：新任教諭，教諭困難，発達障害児支援負担，幼稚園教諭

問題と目的

近年、特に首都圏において幼稚園教諭や保育士などの保育者の不足は深刻である。その要因の一つとして、保育者の離職率の高さが挙げられる。平成25年度の文部科学省の調査によると、教員の平均年齢は、公立幼稚園を含むすべての公立学校（小・中・高）と私立高等学校においては40代半ばであるのに対し、私立幼稚園の平均年齢のみが33.9歳と10歳以上も低いことが示され、保育士はそれよりも低いと言われている（文部科学省，2013）。同報告書によると、私立幼稚園教員の年齢層は、過半数の53%が30歳未満である。また、この平均年齢の低さは、離職率の高さと直結しており、多くの私立幼稚園教諭は、教職経験を積むことなく30歳までに離職していくことが報告されている（西坂，2014；文部科学省，2013）。特に、就職直後の最

初の3年以内で離職する保育者も少なくない(西坂, 2014)。保育者の離職率は、なぜこれほど高いのであろうか? その原因を追究する為に、保育者のストレスやバーンアウト現象から多くの研究がなされている(西野, 2000; 上村・七木田, 2006; 斉藤ら, 2009; 赤田, 2010)。

上村・七木田(2006)は、保育者のストレスについて研究し、同僚(園内の保育士)からサポートや支援を受けていない保育士は、受けている保育士に比べてストレスを感じやすいことを明らかにした。また、保育をすることで自分が成長できていないのではないかという自己懐疑的なストレスを感じている者が多いという結果から、保育者は、職業を通して自己実現が困難な状況にあるのではないかと考察している。

一方、西野(2000)による保育者のストレス研究では、保育所における勤務経験の長さが保育者のストレスに影響するかどうかを分析した。西野は、保育者としての経験年数の長さによって、ストレス耐性(ストレスに対する強さ)に差は見られなかったと報告している。しかしながら、勤務経験の長さは、上司に対する自己主張得点(自分が言いたいことが言えるか)に影響しており、上司に対する自己主張得点は、勤務経験が長いグループ(よりベテランの保育者)の方が中くらいまたは短いグループ(若手の保育者)よりも高かったと述べている。職場で言いたいことが言えないことも、若手の保育者のストレスに影響して可能性もある。

保育者のバーンアウト傾向とストレスコーピングの観点から、斉藤ら(2009)は研究を行っている。バーンアウト傾向が高いのは、40代50代以上の保育士よりも20代30代の若手の保育士に多く、それはとりもなおさず、経験年数10年以下の保育士は、20年以上の保育士よりもバーンアウト傾向が高いことを示している。また、コーピングストラテジーについての分析では、健常群と、バーンアウト傾向群は、問題に直面した時に、異なる解決方法を取り入れていることがわかった。健常群は、困難な問題に正面から向き合う「挑戦」というコーピングや、積極的に気分転換しようとする「気晴らし」と言った感情をコントロールしようとするコーピングを多く用いていることが示唆された。一方、バーンアウト傾向群は、「八つ当たり」や「諦め」などのネガティブな情動中心のコーピングと関係があることが報告されている。

西坂(2014)は、保育者の中でも特に幼稚園教諭の職業継続の意思と教職経験年数・職場環境の関係について、700名以上の私立幼稚園教諭を対象に調査している。調査対象者の中で9割の幼稚園教諭が「やめたいと思ったことがある」と答えていることが報告されている。また、その離職理由は、「職場の人間関係」「残業が多い」「給与」「自分の保育の行き詰まり」などであった。職業継続意思については特に興味深く、20代後半の教諭は3年以内に離職を考えている者が多い傾向があることが示唆された。また、3年以内に離職したいと考えているグループは、そうでないグループよりも、「産休・育休の取りやすさ」「保育についての相談・支援機能」「研修・研究会の保障」においてこれらの環境が整っていないと感じていることも西坂によって明らかになった。西坂(2010)による若手幼稚園教諭を対象とした同様の研究では、教職経験が3年以内の若手教諭は職場の人間関係にストレスを感じていることを報告している。

これまでの研究は、なぜ保育者が、保育士・教諭としての経験を積み、キャリアとして発達

させることが困難であり、20代における離職率が高いのか、という問いに対してある方向性（職場環境の問題や人間関係におけるストレスなど）を示していると思われる。

しかしながら、若手保育者にとってどのような事柄が困難と感じられるのか、その具体的な内容はあまり研究がなされていない。特に、新任時の職務上の困難がどのようなものかいまだに明確ではない。本研究では、特に離職率の高い私立幼稚園教諭に焦点をあて、新任時の職務上の困難を研究するとともに、現在（2年目以降）の職務上の困難との比較を通して、新任時特有のストレスや職場環境の困難を明らかにする。

より良い保育の為には、保育者の心の健康は必須である。本研究を通して私立幼稚園教諭の職務上の困難を明らかにし、具体的な課題を抽出することは、保育者の将来におけるキャリア継続につながる重要な視点を明確にすることができると考えられる。保育者が職業の継続やキャリアとして発達でき、ベテランの保育者が増えるようになることは、なによりも子どもたちにとって大きな利益になると考えられる。

研究方法

データ収集

調査協力者：調査協力者は、男性4名と女性93名の合計97名（平均経験年数は6.83年；標準偏差6.98）であったが、その中で4名は保育園所属であったため、今回の分析から除外した。従って本研究の分析対象者は92名（男性3名・女性89名）の私立幼稚園教諭のみである。調査に協力してくれた幼稚園教諭の経験年数は、40%が3年以内で、5年以内を含めると58%、10年以内まで含めると81%に達する。従って、この調査データは、経験年数10年以内の若い(20代)教諭の新任時の経験や現在の経験を反映していると言える。教諭の経験年数分布は、以下の表1のとおりである。

表1 幼稚園教諭の経験年数の分布

経験年数	度数 (%)
3年以内	36 (40%)
3～5年	17 (18%)
6～10年	21 (23%)
11年以上	16 (17%)
未記入	2 (2%)
合計	92 (100%)

これらの調査協力者は、コンビニエントサンプルであり、調査アンケート用紙の配布と収集

方法については、下記の手続きにおいて詳細に述べる。

手続き・調査時期：2010年から2013年にかけて、以下の3つの方法でアンケート用紙の配布と回収を行った。

- ① 現職教諭を対象とした研究会・教育フォーラムなどにおいて、アンケート用紙と切手を貼った返信用封筒をセットにした封筒を会場出入りに設置し、主催者に依頼して調査の趣旨を簡単に説明してもらい調査協力をお願いした。調査に賛同した教諭のみ、後日各自の自由意思で返信してもらった。
- ② 幼稚園長に直接依頼し、各園でアンケート用紙及び切手を貼った返信用封筒を配布してもらい、各教諭の自由意思で返信してもらった。
- ③ 教育関係機関（教育センターなど）に協力を依頼し、研修会において、アンケート用紙と切手を貼った返信用封筒をセットにしたものを会場出入りに設置し、主催者に依頼して調査の趣旨を簡単に説明してもらい調査協力をお願いした。各教諭の自由意思で返信してもらった。

本研究の場合、多様な方法によって収集されたデータであるため、回収率の計算は省略する。

質問紙アンケートの作成

予備調査：アンケート質問項目は、小学校教員用と幼稚園教諭用を併用できるように作成した。アンケートの質問項目の記述に関して、「小学校（園）……」あるいは、「校長（園長）」などのように、（園）で表現して幼稚園教諭への質問項目として対応させた。

2010年から予備調査を第一段階として実施して、どのようなことに困難を感じるかを、教育学部卒業生の現職教諭に記述してもらい、その結果を基に、アンケートの質問項目を作成した。この予備調査では、「何に困難や大変さを感じるか」という問いに対して自由記述式で回答してもらった。

パイロットテスト：7名の現職小学校教諭（教職大学院生を含む）によって、パイロットテストを行った。その結果、発達障害児に関わる質問項目においては、必ずしも発達障害であることが診断されていない児童も多いことから、「発達障害児」から「軽度の発達障害が疑われる児童」という書き方に変更した。

質問紙は、3つの領域からなっている。第1部は新任時に困難（大変だ）と感じた事柄の項目であり、「新任時に経験したことを思い出してお答えください」という質問文を提示した上で、以下の13項目（①子どもとの関係；②保護者との関係；③学級経営；④生活指導；⑤授業（保育）について；⑥管理職との連携や協力；⑦学校（園）内での連携や協力；⑧管理職との人間関係；⑨学校（園）内での人間関係；⑩校（園）務分掌；⑪軽度の発達障害が疑われる子どもへの対応；⑫軽度の発達障害が疑われる子どもの保護者への対応；⑬初任者研修）のそれぞれについて「1：全く大変ではなかった」～「6：とても大変だった」の6段階評定で回答をお願い

いし、その具体的内容を自由記述形式で記述してもらった。

第2部の現在（2年目以降）大変だと感じている事柄は、第一部の13項目のうち⑬初任者研修を除いた12項目で、「現在、経験されていることについてお尋ねします」という質問文から始まり、第1部と同様に6段階評定で回答をお願いした。具体的な内容については、項目ごとではなく、第2部の最後に自由記述欄を設け記載する形式とした。

フェイスシートは、上部にアンケートのタイトル「新任先生をサポートするために必要な情報を集めるためのアンケート」、中部にアンケート調査の趣旨と、個人情報保護に関する説明文を記載した。フェイスシート下部に、①性別、②経験年数、③所属（保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校）、④年齢を記入してもらった。

個人情報保護に関しては、無記名であることを含め、回答はすべて数値化され個人や学校などが特定されないことを明記した。また、アンケートへの回答をもって、本調査への参加に「同意した」こととみなす旨を記載した。

結果

1. 新任時の困難

13項目のそれぞれについて、私立幼稚園教諭が新任時に感じた困難（大変さ）の平均値と標準偏差を表2に示す。

表2 幼稚園教諭新任時に感じた困難（大変さ）の平均値と標準偏差

	平均値	標準偏差	度数
子どもとの関係	3.89	1.35	92
保護者との関係	3.63	1.39	91
学級経営	4.09	1.29	89
生活指導	3.69	1.28	90
保育について	4.33	1.23	89
管理職との連携や協力	3.58	1.40	89
園内連携や協力	3.49	1.23	90
管理職との人間関係	3.30	1.58	89
園内人間関係	3.08	1.51	90
園務分掌	3.42	1.22	73
軽度の発達障害が疑われる子どもへの対応	3.90	1.58	73
軽度の発達障害が疑われる子どもの保護者への対応	3.57	1.55	70
初任者研修	2.84	1.35	79

上記13項目の中で、新任時の困難度の感じ方が異なるかどうかを検証するため、分散分析（反復測定）を行った。その結果、 $F = 3.89$ ($df = 12, 552$; $p < 0.01$) となり、13項目の困難度の感じ方が有意に異なることが判明した。多重比較の結果、新任時に最も困難度が高い項目は「保育」で、12項目中9項目との比較において1%水準で有意に困難度が高かった。次いで新任教諭にとって困難と感じられるのが、8項目と有意差（1%水準）がみられた「学級経営」であった。それぞれの13項目の平均値とその標準誤差とともに、図1に示す。

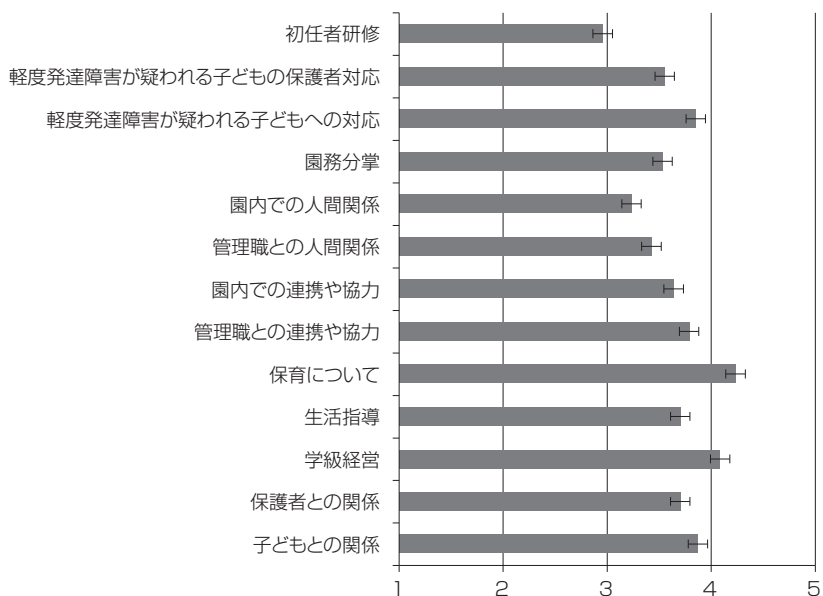


図1 幼稚園教師新任時の職務上の困難－平均値と標準誤差

次に、これら2項目がなぜ新任教諭にとって特に困難であるのか、その具体的な理由を自由記述から検証する。

1) 新任時の「保育」の困難さに関する具体例

新任教諭にとって「保育」のどのような事柄が困難なのであろうか。保育における困難の記述内容は、(1) 保育の準備や教材研究の時間確保の困難、(2) 保育経験の不足のための困難、(3) 子どもの理解不足による困難、(4) その他の困難の4つに分類することができた。以下の表3にその具体的な内容を示す。また、「保育」項目において、あまり困難を感じなかった教諭らの記述は、2つ (1) 自分の心がけや努力によるものと、(2) 学校側の支援によるものとに分けられ、その記述結果を以下の表4に示す。

これらの記述から、保育雑誌で勉強するなどの自分で工夫することや、周りの先輩の教諭のやり方を模倣するなど、自分なりに考えながら保育を経験していくことが喜びを感じることに通じているようにみられる。また、幼稚園側の支援や先輩教諭の協力によって新任の負担や大

表3 保育に関する困難の具体的な内容

(1) 保育の準備・教材研究の時間確保の困難
<ul style="list-style-type: none"> • 1日1日を過ごすことに追われていた。反省をする余裕もなかった。 • ピアノの練習, 教材研究, 個人要録とやらなければいけないことが山ほどあって, 土日も仕事をしていたように思います。 • 日々の教材の準備や片づけ+自分でやりたいことなどに追われていた。 • 活動や行事がたくさんあり, 自分自身が追われている毎日だった
(2) 保育の経験不足のための困難
<ul style="list-style-type: none"> • 全部が初めての毎日でわからないことだらけだった。 • 日々探り探りの状態だった。毎日, その日を過ごすことで精一杯でどんな風に保育していたか思い出せない部分も多い。 • 何もかもが初めてのことばかり, 個性の強い子どもも多いクラスだったので目の前にあることをこなしていくので, いっぱいいっぱいになってしまうことが多かったです。 • 自分自身の引き出しが少ないので, 勉強しながら日々保育をするという点では今より大変でした。
(3) 子どもの理解不足の困難
<ul style="list-style-type: none"> • 子どもの気持ちに共感できない(理解が難しい)時が多く, 毎日悩んでいました。 • 障害児と周りの子の関わり方が上手くいかないことが長く続いた時はいろいろと方法を考え悩んでいた。
(4) その他の困難
<ul style="list-style-type: none"> • 園児に対して, 保育士の人数が少なかったので大変だった。 • どちらかと言えば管理的な保育だった。子ども達にあまり自由度がない。 • 保育以外に体操教室もあり, 負担が多かった。 • 担任全員が新人だったため。

表4 保育に関するポジティブな記述例

(1) 自分の努力と心がけによるもの
<ul style="list-style-type: none"> • どのように声かけをすると子ども達を引きつけることが出来るのか, 喧嘩の仲裁など, 経験不足であったので, 毎日考えながら保育を行っていた。 • いけないことはいけないと伝えたり, やる時はやるとの声かけ。 • 保育雑誌を買い, 困らないようにした。行事が多くその導入をしたため困らなかった。 • 一生懸命関わると, 子どもたちもそれなりに表現してくれた。共に成長できた。 • フリーの先生のやり方や他の先生のやっている声掛けややり方を真似てやってきた。子どもの気持ちも少しずつ把握できるようになった。 • 子どもたちを一人一人見ること。 • 1年目は, 補助でしたが保育よりも事務中心だったため, 念願のクラス担任に入り, 毎日子どもたちと過ごせることが喜びであり, 大変だとは思っていなかった。
(2) 園側の支援によるもの
<ul style="list-style-type: none"> • 園, それから先輩が細かく丁寧に指導して下さった。一人だけの保育をさせず, 学年ごとに同じことをする園だったので, やりやすかった。 • 学年ごとのカリキュラムと行事があり, 特に問題がなかった。
(3) その他の支援によるもの
<ul style="list-style-type: none"> • ベテランの先生に頼りきりで見て学ばせてもらった1年, 今考えるともう少し自分の言いたいことを伝えれば良かったと思う。 • アイディアマンの子どもたちだったので, 子どもたちと一緒に楽しめた。 • 実際に子どもと関わるのがその時まで少なかったので周りの先輩に聞いて学んでいった。 • 悩む事も多かった。先輩がよくアドバイスしてくれた。

変さの感じ方が軽減されることが考えられる。

2) 「学級経営」の困難さに関する具体例

2番目に新任時の困難度が高かった「学級経営」における具体的内容は(1)子どもの理解や関係を築くこと、(2)経験不足、(3)幼稚園の指導体制、(4)特別な支援を必要とする子どもの指導、(5)保護者との関係の5要因に分類された。

表5 学級経営に関する困難の具体例

(1) 子どもの理解や関係を築くこと
• 気合だけカラ回り。初めは不安定な子もいた。
• 子どもを集中させて話をすることが難しかった。
• 最初は言うことをなかなか聞いてくれなかった(年少)。
• 一学期に、あまり注意したりせず保育してしまい、少し子どもがだらけてしまった。
(2) 経験不足
• ちょっとしたあいた時間が困った。
• 学校で習ったことは、活かせず上手く学校経営ができなかった。
• 自分自身の保育観が他の先生を見て「こうしたい」と膨らみ過ぎ、あっちこっち手を出し過ぎ一番大切にしたいものが分からなくなってしまった。
• 自分のカラーを出して良いんだと言われたが、自分のカラーがわからず、となりのクラスの真似になっていると言われたこと。
(3) 幼稚園の指導体制
• 周りのクラスについていくのが大変だった。自分でやりなさいという指導だったため。
• 41人を一人でやっていく自信がありませんでした。
• 行事がとて多い上に、助手の先生もいなかった為学年の仕事にもついていくことに必死だった。
(4) 特別な支援を必要とする子どもの指導
• クラスから出ていってしまう子、発達障害の子がいる中で他の子どもたちにまで目が行かなくなってしまうことが多かった。
• 初めての保育に加え、障害児が1名いたので、自分の中でたくさん悩んだ。
(5) 保護者との関係
• トラブルがあった時の保護者への対応などが難しかったです。
• 一緒に学年の先生がベテランの方で、サポートしてもらった反面保護者に比較されたから。

初任時には、教諭自身の経験不足を学級経営に困難をきたす要因としてあげる教諭も多いが、幼稚園側の教諭に対する指導体制の不備も新任教諭のストレスや困難の感じ方に影響していることがわかる。一方、「学級経営」に関してポジティブな記述例もあり、それらは大まかに2つ：(1)自分の努力と心かげによるものと(2)園側の支援によるものに分けられた(表6参照)。学級経営に関してあまり困難を感じなかった新任の幼稚園教諭には、主任などのベテランの教諭が指導したり、先輩教諭からの支援やアドバイスが多くみられた。支援を得られることで、毎日の保育の中で意義や喜びを感じる余裕が生まれ、それがストレス軽減に影響しているように見受けられる。

表6 学級経営に関するポジティブな記述例

(1) 自分の努力と心がけによるもの
<ul style="list-style-type: none"> • 身支度などの基本的習慣の個別指導に追われていた。一斉活動の的には、ゲームなど、皆が一緒に参加できるものを考えた。製作→遊びへの時間もゆとりを持って、毎日少しずつ行い、継続して楽しんでいた。 • 各担任まかせだったから何でもやれた。
(2) 園側の支援によるもの
<ul style="list-style-type: none"> • 全て指導して頂き、勉強していった。 • 去年は年少18人クラスを私が担任、プラスに年少主任としてベテラン先生がいてクラスに常に来てもらうことができたので色々アドバイスを取りながらクラスを運営することが出来ました。 • 5クラス中、新任4人で一緒に入ったので丁寧な指導してもらえたので大変ではなかった。 • 人数が少なかったこともあり、まとまりがあった。運動会などの行事にも協力的でした。 • 年少18人クラスを私が担任、プラスに年少主任としてベテラン先生がいてクラスに常に来てもらうことができたので色々アドバイスを取りながらクラスを運営することが出来ました。
(3) その他の支援によるもの
<ul style="list-style-type: none"> • 他の先生方もサポートしてくれたり、相談にのってくださったので、悩んだり困ることはあっても大変と感じるものではなかった。 • 先輩と二人担任で、一から教わりました。 • 一言、言えば動くような子どもたちだった。 • クラスの進め方が分からなかったが、先輩たちのアドバイスでなんとか…。

2. 現在（2年目以降）の教諭の困難

現在（2年目以降）、教諭がどのようなことを一番困難に感じているか、またその具体的内容を明らかにする。12項目の職務上の事柄について、現在は何のくらい困難（大変さ）を感じているかについて分析した結果を以下の表7に示す。

表7 現在（2年目以降）の困難さの平均と標準偏差

	平均値	標準偏差	度数
子どもとの関係	3.25	1.279	91
保護者との関係	3.40	1.124	91
学級経営	3.66	1.144	86
生活指導	3.51	.987	87
保育について	3.53	1.250	85
管理職との連携や協力	3.25	1.243	85
園内連携や協力	3.16	1.173	88
管理職との人間関係	2.99	1.251	86
園内人間関係	2.97	1.292	89
園務分掌	3.06	1.221	72
軽度の発達障害が疑われる子どもへの対応	3.82	1.056	90
軽度の発達障害が疑われる子どもの保護者への対応	3.68	1.140	90

上記12項目の中で、2年目以降の教諭が、現在どのような要因をより困難であると感じているかを検証するため、分散分析（反復測定）を行った。その結果、 $F = 5.592$ ($df = 11, 682$; p

<0.001) となり、12項目の困難度の感じ方が有意に異なることが判明した。多重比較の結果、現在（平均経験年数7.85年）教諭にとって最も困難度が高い項目は「軽度の発達障害が疑われる子どもへの対応」で11項目のうち他の8項目よりも有意（1%水準）に困難度が高かった。次に「軽度の発達障害が疑われる子どもの保護者対応」で、他の7項目よりも1%水準で有意に困難度が高かった（図2参照）。

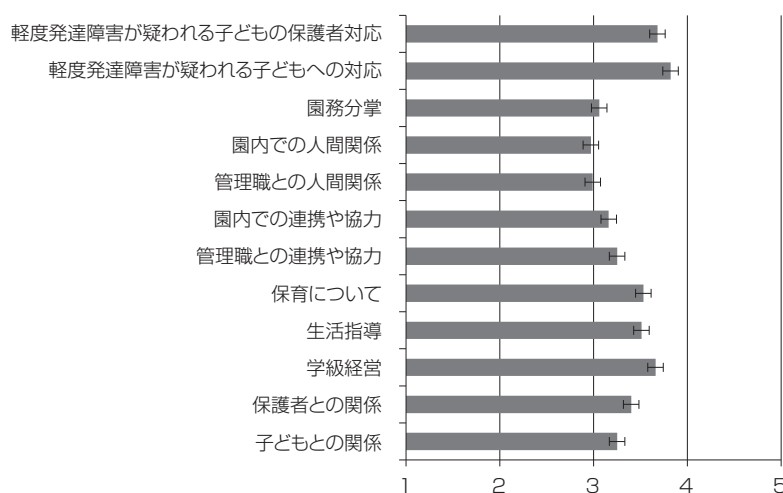


図2 幼稚園教諭-現在の職務上の困難-平均値と標準誤差

次に、2年目以降の教諭にとって、これら2項目がどのように困難であるのか、その具体的な困難の理由を自由記述から抽出する。

「軽度発達障害が疑われる子どもへの対応」の困難さに関する具体例

現在（2年目以降）の幼稚園教諭の困難度が最も高かった「軽度発達障害が疑われる子どもへの対応」については、非常に多くの具体例が記述されていた。これらの記述は大まかに4つ（1）教諭の知識や理解不足、（2）公平性の困難、（3）保護者不理解、（4）支援連携の問題に分

表8 「軽度発達障害が疑われる子どもへの対応」及び「軽度発達障害が疑われる子どもの保護者への対応」の困難さに関する具体例

(1) 教諭の知識や理解不足
• どんな風にすればよいか分からなかった。
• 入園したばかりでまだ診断は出ていなかったが、おもちゃを全部出したり噛んでしまうことが続いた。目を離すと噛んでしまうので必ず目で追い、止められるように気をつけた。
• どのようにすれば、その子が過ごしやすいかを毎日悩みながら過ごしていた。
• 軽度の子にも限らず、重度の子に関しても、どこまでが障害による拒否なのか、単なるわがままなのか、見極めが教諭に必要なってくる。障害児と担任だけの関わりではなく、園全体そして家庭との連携が重要となってくるために、父兄との信頼関係を築くことが大切。

<ul style="list-style-type: none"> • 2年目となり園側からの期待や仕事量も変わり、クラスの子どもにも気になる子や障害のある子が居て違う意味で大変になったことも沢山あります。
<p>(2) 公平性の困難</p> <ul style="list-style-type: none"> • つい、障害のある子にばかり目がいってしまったり、その子のペースにあわせてしまい、周りの子を待たせてしまうことが多いです。今、軽度の自閉症の子と発達が遅れている子の2名を1人で見ているのですが、大変な時は園長先生や主任に入っていただくこともあります。しかし、どこまでお願いしたら良いのか、また、「自分のクラスのことなのだから、自分で見なくては…。」と思うとお願いするのが申し訳なく感じています。
<p>(3) 保護者不理解の問題</p> <ul style="list-style-type: none"> • 親が自分の子どもの障害に気がつきつつも相談がない。 • 障害の疑いのある子の保護者は気づいていても「まだ大丈夫」という気持ちがあるようです。あまり話をしながらない方もいらっしゃいます。 • 保護者への対応も、障害者の保護者だけでなく、言葉の使い方など選んでいかなければいけないし、対応を変えていかなければいけないので、慣れるまでは大変である。 • 障害児との関わりがほとんどなかった親世代の理解力が低い。 • 疑いのある子どもの保護者がなかなか気づいてくれず、年長なので就学についても考えていかななくてはならないので今後が心配。 • 親が認めてくれなかったのと、どのように伝えていったらよいのか分からなかった。
<p>(4) 支援連携の問題</p> <ul style="list-style-type: none"> • 障害を個性と捉え、いかにその子の良さを見出し伸ばしてあげられるか？好きな事を思いっきりやらせてあげたいが、幼稚園では無理なところもある。

けられた（表8参照）。

これは、小学校教諭についても同様の困難が報告（高平他，2015）されているが、保護者の不理解や教諭自身の知識の不足による困難が多くコメントでみられた。

一方、コメントの中には、ポジティブな意見も見られた。それらは、(1) 自分の努力と心がけによるもの、(2) 園側の支援によるもの、(3) その他（保護者）の支援によるもの、の3つ

表9 「軽度発達障害が疑われる子どもへの対応」及び「軽度発達障害が疑われる子どもの保護者への対応」のポジティブなコメントの具体例

<p>(1) 自分の努力と心がけによるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> • 疑いはあっても、大変という意識はあまり持っていませんでした。 • 戸惑うこともありますが、その都度対応しています。大変な面もありますが、それ以上に「かわい」と感じたり成長を感じて嬉しく思うこともあります。 • 過去のことは、振り返れば大変だったことも多いが、それで鍛えられた面は大きい。今のことは、大変とは思っていない部分もある。気を持ちよう、難しさや壁は常にある。学年で活動することも多く、学年の先生とは、よく話し、教諭の人数も増え協力し合って子どもを見ていくようにしている。
<p>(2) 園側の支援によるもの</p> <ul style="list-style-type: none"> • 園内での（先生方との）連携や協力がありスムーズな保育が出来るようになりました。園には慣れてきましたが、子どもは毎年変わります。同じ対応でも子によって違いがあり、今のクラスに合った保育をしていく必要があるので決して「全く大変ではない」とは言えないのが現状です。障害のある子への対応は、より良いものを…と思うときがありません。障害のある子の保護者への対応は、ありのままの様子を伝え、「一緒に」（家庭と園で）考えていくようにしているので大変とは感じません。知識を得ていくことで子どもはもちろんのこと、保護者への思いや対応も変わりました。

<ul style="list-style-type: none"> ・フリーの先生や、副園長・園長も発達障害の子と関わりを持ち、皆で見ているので、担任の先生の負担は、あまり感じない。
(3) その他（保護者）の支援によるもの
<ul style="list-style-type: none"> ・保護者も、よく子どもを理解していて園から言われなくても療育センターに足を運び指導を受けている。また、その情報もくれる。 ・発達障害のある子との関わりは日々考えさせられたりできる限り寄り添ったり工夫しながら行っているが保護者が元保育者ということもありとても理解があり園に対して協力的であったり、まめに連絡を取り合うことで信頼関係も築けてきた。

に分けられた（表9参照）。

平均経験年数7.6年の中堅の幼稚園教諭であっても、発達障害に関する知識や理解の不足や保育内容の問題を痛感して知識の必要性を訴えているのは事実であるが、一方、幼稚園や保護者、療育センターなどの周りからの支援があることがポジティブな意見に共通してみられる。また、コミュニケーションの重要性や信頼関係を築くことの大切さも、負担として感じさせない共通点であろうかと思われる。

以下に、上記以外で多く記述があった「その他の困難」を挙げる（表10）。

表10 その他の現在の困難要因

<ul style="list-style-type: none"> ・初年度の時と現在では保育のやり方も変化してきているので大変な事は沢山出てきている。昔と今では親の考え方や感覚も変化しているので、言葉をうまく選ばないと、伝えられない事も多いように感じている。
<ul style="list-style-type: none"> ・生活習慣を園に任せる保護者が増えた。おむつのはずれてない子が多い。食物アレルギー対応も増えた。
<ul style="list-style-type: none"> ・去年度の経験があるため次はどうするというマニュアルのようなものを考えられるようになった。2年目で分からない事も多々あるが、経験でカバーできる。新任でないプレッシャーがややある。
<ul style="list-style-type: none"> ・見えてきた部分と役割が変わってきたので大変だと思うところが多くあるように思う。
<ul style="list-style-type: none"> ・保護者の実態は年々様々になり、非常に協力して頂ける方とクレーマーと2分されており保護者の対応に四苦八苦しています。

新任時のように経験不足による困難はあまりみられないが、やはり保護者との関係において模索していることがうかがえる。しかしながら、経験を重ねることで周りを冷静に観察し自分の状態を受け入れられるようになっていくことをうかがわせるコメントも多くみられた。

3. 新任時と現在の困難要因の違い

各項目について、新任時と現在（2年目以降）の困難度について違いがあるかどうかを検証するために、対応のあるサンプルのt検定（両側）を行った。その結果を表11に示す。また図3に、新任時の困難度の平均値とその標準誤差及び現在の困難度の平均値とその標準誤差をグラフで表した。

現在より新任時の方が有意に高い（より大変であったと感じている）項目は：①保育につい

表11 対応のあるt検定による幼稚園教諭の新任時と現在の大変さの差の分析

	新任時平均－現在平均	標準偏差	自由度	Pair T
子どもとの関係	0.615	1.428	90	4.111**
保護者との関係	0.189	1.413	89	1.268
学級経営	0.429	1.578	83	2.490*
生活指導	0.118	1.523	84	.712
保育について	0.805	1.452	81	5.018**
管理職との連携や協力	0.381	1.536	83	2.273*
園内連携や協力	0.291	1.254	85	2.149*
管理職との人間関係	0.310	1.552	83	1.828
園内人間関係	0.080	1.527	86	.492
園務分掌	0.279	1.280	67	1.801
発達障害児対応	0.082	1.673	72	.420
発達障害児保護者対応	-0.114	1.611	69	-.594

**P<0.01; *p<0.05

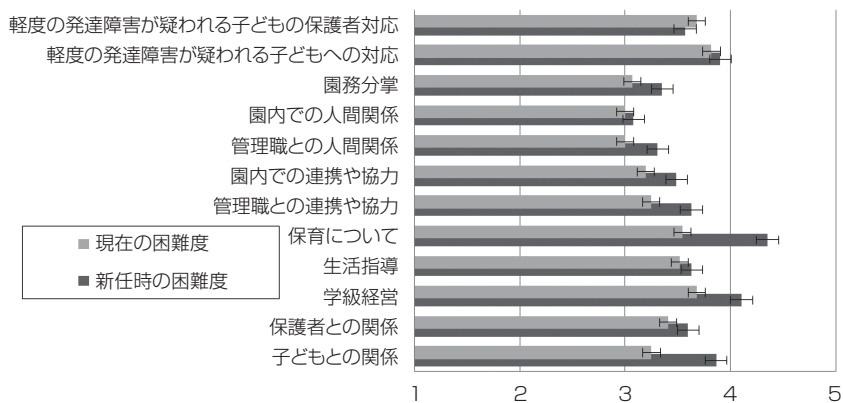


図3 新任時と現在の困難度の比較 - 平均値と標準誤差

て (p<0.001)；②子どもとの関係 (p<0.001)；③学級経営 (p<0.05)；④管理職との連携や協力 (p<0.05)，⑤園内での連携や協力 (p<0.05) であった。一方，新任時より現在 (2年目以降)の方が有意に高い (より大変だと感じている)項目は存在しなかった。

次に，新任時と現在の困難度の相関係数を以下の表12に示す。「子どもとの関係」「保護者との関係」「保育について」「管理職との人間関係」「園内連携や協力」「管理職との人間関係」「園内の人間関係」「園務分掌」の8項目においては，1%水準で有意な正の相関関係がみられた。特に，「子どもとの関係」「園内連携や協力」「管理職との人間関係」「園内の人間関係」「園務分掌」の5項目については，相関係数が0.4以上であり，比較的強い正の相関関係がみられた。

表12 幼稚園教諭の新任時と現在の困難度（大変さ）の相関係数

新任時と現在の大変さ	r	n
新任時と現在の子どもとの関係	0.408**	91
新任時と現在の保護者との関係	0.371**	90
新任時と現在の学級経営	0.155	84
新任時と現在の生活指導	0.09	85
新任時と現在の保育について	0.314**	82
新任時と現在の管理職との連携や協力	0.344**	84
新任時と現在の園内連携や協力	0.456**	86
新任時と現在の管理職との人間関係	0.438**	84
新任時と現在の園内人間関係	0.409**	87
新任時と現在の園務分掌	0.452**	68
新任時と現在の発達障害児対応	0.262*	73
新任時と現在の発達障害児保護者対応	0.300*	70

**p<0.001, *p<0.05

従って、新任時に「子どもとの関係」「園内連携や協力」「管理職との人間関係」「園内の人間関係」「園務分掌」が困難だと感じた幼稚園教諭ほど、現在もそれらの事柄を困難だと感じている傾向があることが示された。

考察

新任時の私立幼稚園教諭にとっては、保育や学級経営などが困難として捉えられ、精神的また時間的負担になっていることが示された（図1参照）。しかしながらそれらは、2年目以降、経験を重ねることによって多少軽減されることが、新任時と現在の困難度の比較（対応のあるt検定による分析）から明らかになった（表12, 図3参照）。一方、2年目以降の現在において困難であると感じられる要因としては、「軽度の発達障害が疑われる子どもへの対応」と「軽度の発達障害が疑われる子どもの保護者への対応」が抽出された（図2参照）。具体的な記述コメントには、「軽度の子にも限らず、重度の子に関しても、どこまでが障害による拒否なのか、単なるわがままなのか、見極めが教諭に必要なようになってくる。」と、教諭の見極める能力の必要性を述べている。同時に、「父兄との信頼関係を築くことが大切。」とのコメントもあり、保護者とのコミュニケーションの重要性も認識している。発達障害に関する専門知識の充実を図ることは、幼稚園教諭の困難やストレスを軽減につながり、発達障害児を持つ保護者とのコミュニケーションにも役立てられるのではないかと考えられる。今後、保育者養成機関においても専門知識の充実が望まれる。

先行研究（西坂，2010）から，私立幼稚園教諭の離職理由の中でも，特に若手の教諭の離職理由とされているのが「職場の人間関係」である。しかしながら，本研究の結果では，新任時も現在（2年目以降）も「管理職との人間関係」「園内の人間関係」における困難度は，決して高くなかった（平均値は3.0前後であった）。それは，新任時と現在を比較したt検定による分析からも明らかで，有意差は見られなかった。一方，相関分析の結果から，「子どもとの関係」「園内連携や協力」「管理職との人間関係」「園内の人間関係」「園務分掌」など，職場の人間関係に関わる要因において，0.4以上の比較的強い正の相関関係がみられた。これは，新任時に人間関係において困難を感じている幼稚園教諭ほど2年目以降（平均経験年数6.8年）も困難を感じる傾向があることを示している。「管理職との人間関係」「園内の人間関係」の2要因に関しては，困難であると感じている教諭はそれほど多くはないが，新任時に強く困難であると感じた教諭ほど2年目以降もより困難であると感じている傾向が強いことを示している。

これらの人間関係に関わる要因にはコミュニケーション能力が重要と考えられるが，幼稚園内外での良好な人間関係の形成能力が，職務上の負担やストレスの感じ方に影響しているのではないかと考えられる。職場でのコミュニケーションが円滑であれば，同僚からの支援やアドバースなども受けやすく，それがストレス軽減にもつながるのではないかと考えられる（上村・七木田，2006）。

謝辞

この調査に協力してくださった多くの私立幼稚園や教育機関の方々を中心に心より感謝いたします。

参考文献

- 西野美佐子・木村進「保育従事者のストレス」『保育学会論文集』2000，638-639。
山城真紀子・上地亜矢子・大城一子・嘉数朝子「沖縄県の保育者の職業ストレスと健康についての研究I：認可保育園と認可外保育園を対象に」『琉球大学教育学部教育実践総合センター紀要』第12号，2005，79-86。
上村眞生・七木田敦「保育士が抱える保育上のストレスに関する研究」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第3部，55，2006，391-395。
藤原直子・大野裕史・日上耕司・佐田久真貴「大学院生による幼稚園教員への訪問コンサルテーションの実践—教諭による課題分析記録を用いた事例—」『吉備国際大学臨床心理相談研究所紀要』第5号，2008，89-100。
齋藤恵美・田中紀衣・村松公美子・橘玲子・宮岡等「保育従事者のバーンアウトとストレス・コーピングについて」『新潟青陵大学大学院臨床心理学研究』3，2009，23-29。
赤田太郎「保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性の検討」『心理学研究』81，2010，158-166。
西坂小百合「若手幼稚園教諭の精神的健康に及ぼすストレスと職場環境の影響」『立教女学院短期大学紀要』42，2010，101-110。

西坂小百合「幼稚園教諭の職業継続の意思と教職経験年数・職場環境の関係」『共立女子大学家政学部紀要』60, 2014, 131-139.

高平小百合・太田拓紀・佐久間裕之・若月芳浩・野口穂高「小学校教師にとって何が困難か?—職務上の困難についての新任時と現在の分析—」『玉川大学教育学部紀要』2014, 103-125.

厚生労働省「保育を支える保育士の確保に向けた総合的取組」

<http://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11907000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Hoikuka/0000026218.pdf> (最終閲覧日: 2016年1月6日)

文部科学省 (2015)「平成25年度学校教員統計調査」

http://www.mext.go.jp/component/b_menu/other/___icsFiles/afieldfile/2015/03/27/1356146_1.pdf (最終閲覧日: 2016年1月6日)

Kindergarten Teachers' Difficulties at their Work: Analysis of Difficulties for First Year and Current Year

Sayuri TAKAHIRA, Yoshihiro WAKATSUKI, Hiroyuki SAKUMA,
Yutaka MIYAZAKI, Wataru KUDO

Abstract

The objective of this study is to reveal the difficulties of private kindergarten teachers face in their work places. We had asked to teachers “what were the difficulties at the work when you are the first year teacher” and “what are the difficulties at the work in the current year.” Results show that “nursing and teaching” and “classroom management” were the items that teachers when they were the 1st year had felt quite difficult at the work. On the other hand, the challenges that currently teachers face are: 1) dealing with children with developmental disabilities and 2) dealing with parents of the children with developmental disabilities. Moreover, results of correlation coefficients indicates that teacher who feel more difficult in making good relationships among the teachers in their work place when they were the 1st year teacher, tend to feel more difficulties in having good relationships among the teachers in current year. This results might suggest important qualification for teaches in order to become less stressful kindergarten teachers.

Keywords: kindergarten teacher, special education, teacher difficulties